

建築家から見た職能・資格・教育

内藤 廣*

Hirosi Naitou

建築に限らず、多くの分野の職能・資格・教育、どれをとっても社会的にニーズからは外れていると思います。世の中は根底のところできく変わりつつあります。旧来の職能・資格・教育は、なかば機能不全に陥っています。これらの言葉にはどれも暗いイメージが付きまといまいます。本来はもっと前向きなものだったはずですが、もともと何かの理想を実現するための手段であったはずのものが、目的になってしまっているのです。この逆転が起きた時、物事は硬直化し、様相は暗くなります。建築家協会の活動を垣間見たり、教育の現場にたずさわって感じていることです。

建築分野に限って言えば、そもそも建築とは何か、をもう一度問うべきです。建築 (architecture) と建物 (building) は違います。「建築」という言葉は、伊東忠太が明治造語として作り出したものですが、この言葉のいたずらな汎用がさまざまな誤解や誤読の元だったと言ってもよいと思います。言うまでもなく、architectureは抽象名詞で、具体的なものは示さないから複数形はありません。Architectureとは、高次の抽象価値なのです。そこには文化も含まれています。

もちろん、だからといって西欧文化のようになればいいと言うつもりもありません。混同しているのが議論を貧しくしている、と言いたいのです。職能も資格も教育も、architectureに対する正しい認識や意識を置き去りにしてグローバルスタンダードを目指すのはおかしい、ということを言いたいのです。我が国には固有の建築の文化が古来より在り、さまざまな技術や様式を輸入しながらそれなりの歴史を重ねてきたことをことさら無かったものとして忘れる必要もないのです。私たちの文化に合った建築の作り方、文化の形成の仕方が在るはずで、われわれなりのarchitecture像を作り上げるべきでしょう。そのためには、これまで混同してきた価値を整理して、西欧の人達が言っているarchitectureとの違いを意識化すべきです。

技術というのはそれ自体自立しているものです。もちろん技術そのものは人間が生み出し、人間が発展させるものですが、それ自体は孤立した系を持っています。たとえば力学は人間が作り上げたものですが、それ自体はシステムであって、人間とはなんの関係もない閉じた系です。本来、技術とは情け容赦のない非情なものです。私見を言えば、建築とは、非情な技術と情の集合体である文化をつなぎ合わせて、人間のためのより高次の価値を作り上げることだと思っています。であれば、建築を扱う建築家とは、建築学科を卒業して、建物を設計している人達の事を言うわけではありません。建築にまつわる技術に対して広い知識を持ち、人間の精神に対して深い洞察力を持ち、それらをつなぎ合わせる術を知っている人のことです。

こう考えてくると、わたしなりの感想では、世の中で語られている職能も資格も教育も、本来的な意味での建築や文化とはなんの関係もないのではないかと思います。もしそれが、一般的に建築家と言われている建物を設計する人達が生き延びるための方法や方策なら、わたしにはまったく興味がありません。話は逆なのです。今ある現実をどのようにより良いものにできるか、どのようにすれば人間が尊厳を持って生きられる環境を創りだせるか、が唯一無二の問題なのです。それを支える職能の在り方も、それを保証する資格も、それを可能にする能力を身に付けるための教育も、そこから逆算して見直されねばならないと思います。

無数にある地方都市の状態はひどいものです。至るところ戦後植林で埋め尽された山野はどうすればよいのでしょうか。幾つもの超高層が建ち上がる中で、面的に広がった市街地の空洞化はどうなるのでしょうか。高齢化する膨大な郊外住宅地の展望はあるのでしょうか。問題は幾らでもあります。これらのことが起きてくる根底のところ、見えない大きな流れがあるのです。それを捉え、その先の社会を構築するための手段として論じないと、いかなる

*建築家・東京大学教授

職能・資格・教育も暗さを払拭できないと思います。

専門家から見たら笑われるような、青臭い議論を若者とどンドンすべきです。人間とは何か、社会とは何か、文化とは何か、技術とは何か、そして建築とは何か。若者と世代を越えた議論をすべきです。問題を共有すべきです。その中からしか、未来を語る明るい議論は出てこないのではないかと考えています。何故なら、未来はわれわれの世代が生き延びるためにあるのではなく、いまの若者達が自分のものとして生きていくために用意されているのですから。